３－１　基本目標の設定

3-1-1　黒髪キャンパスの基本目標の設定

2013 年（平成 25 年）11 月、本学が 100 年後も輝き続ける大学であることを目指して、「創造する森 挑戦する炎」というコミュニケーションワードを公表した。「創造する森」には世界に向けた新しい価値を創り提案し続ける知の集積を図る、「挑戦する炎」には熱い思いでチャレンジする高い志を持つリーダーを育てる、という意図がこめられている。

これらの期待を具体化し、前章の課題に対応するために下記 3 つの「環境づくり」をキャンパス整備の基本目標として設定する。

（１）研究拠点大学の環境づくり

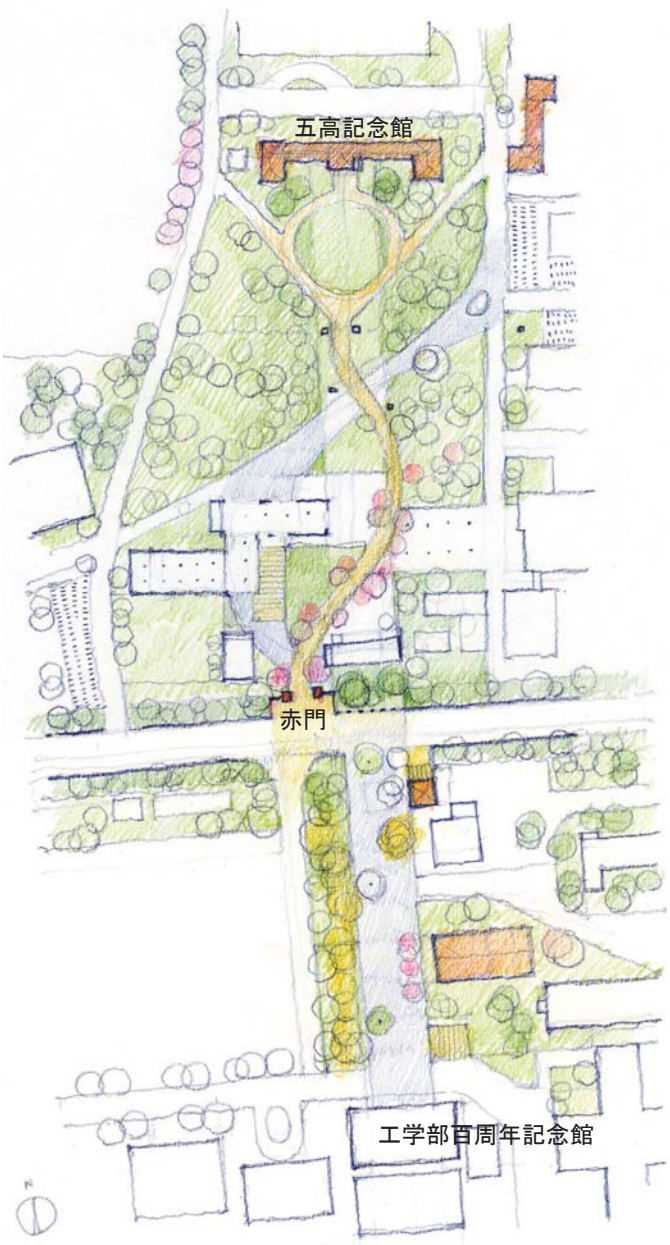
研究拠点大学としての施設の高質化とグローバル化への対応、社会の変化に対応した柔軟性のある施設整備をキャンパス整備の第一の基本目標とする。さらに、黒髪キャンパスにおいては、五高記念館から工学部百周年記念館までの一帯を本学の伝統を守り育てる「シンボルゾーン」とし、大学の ” 顔づくり ” を行う。

（２）快適な学園生活の環境づくり

学生教職員の生活の場として快適な環境を提供することをキャンパス整備第二の基本目標とする。教育・研究施設の快適性を維持・更新するとともに、黒髪キャンパスにおいては、学生会館から附属図書館を含む一帯を「交流ゾーン」と設定し、施設および外部空間の快適性を高める。

（３）地域交流・国際交流の環境づくり

「学都・熊本」の拠点として地域交流が可能な環境、および留学生や海外からの訪問客に対応可能な環境を整えることをキャンパス整備第三の基本目標とする。黒髪キャンパスにおいては先述の「シンボルゾーン」と「交流ゾーン」における交流の場の充実を図るとともに、泰勝寺、リデルライト記念館、白川といったキャンパス周辺の施設の利用を促すための環境も整える。



「熊本大学黒髪キャンパス歴史地区保存整備・利活用計画案」より

図 3-1　シンボルゾーンの整備イメージ

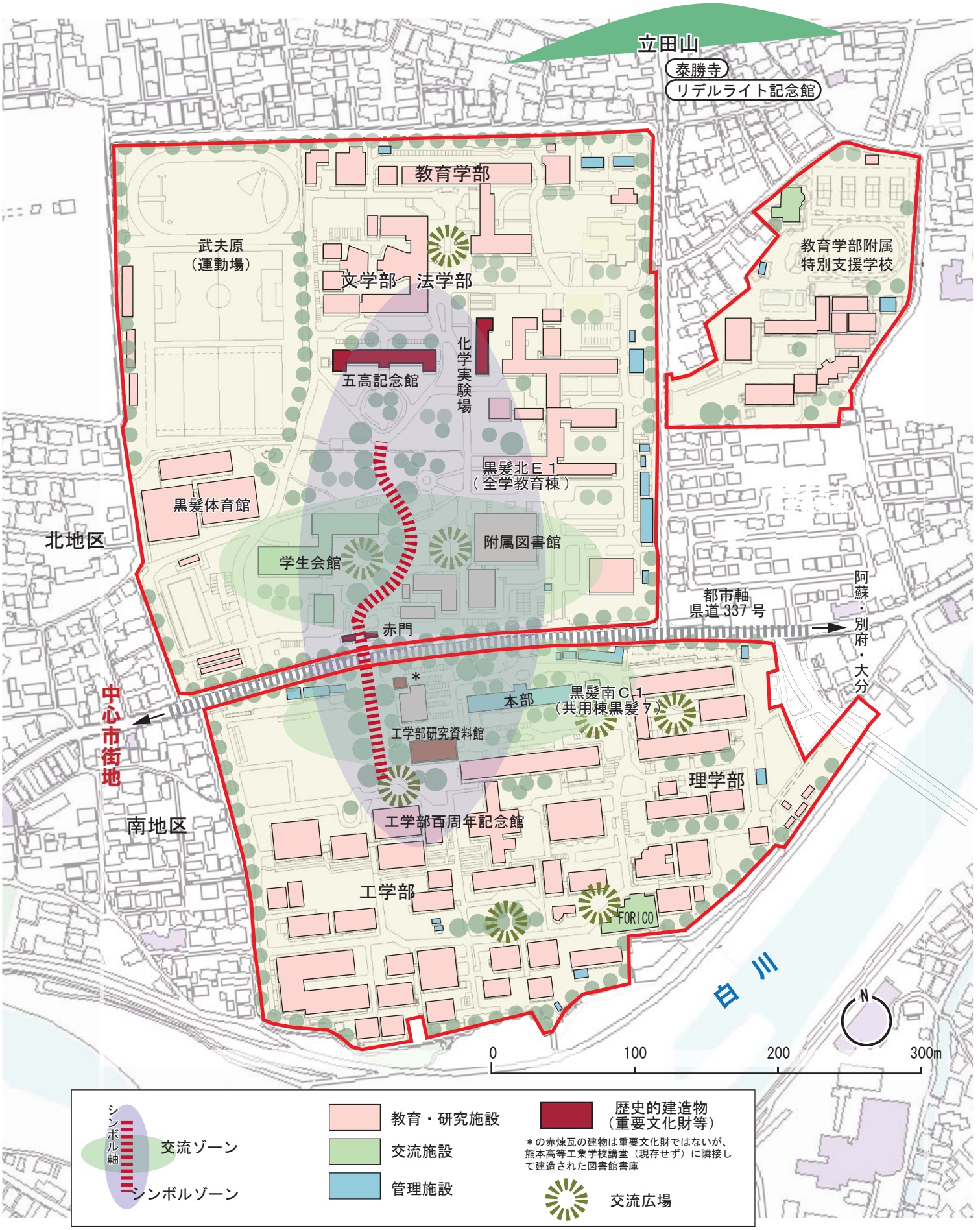
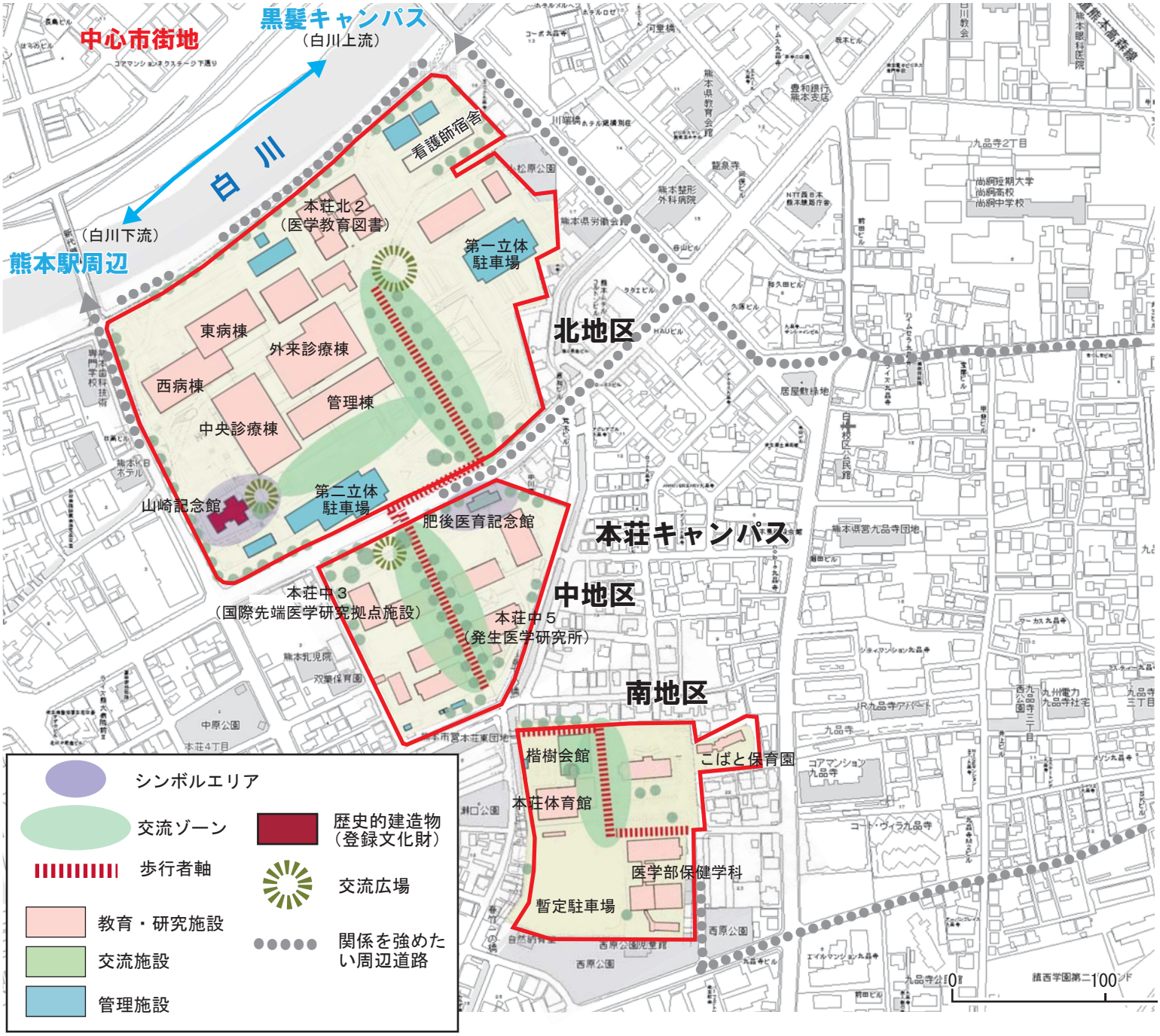


図 3-2　黒髪キャンパスの基本目標

3-1-2　本荘・大江キャンパスの基本目標の設定



（１）研究拠点大学の環境づくり

≪本荘キャンパス≫

附属病院と教育機関が集積する北地区では、外来患者、入院患者へ「心の通う」病院環境を提供するとともに、臨床教育の各種プログラムに対応した機能的な環境づくりを進める。先端医療研究施設の集積する中地区では、時代に対応した医療研究の高度化にフレキシブルに対応できるように明解な機能配置を基本として諸施設の整備・更新に対応する。南地区は保健学科の研究・教育施設の充実を図る。北地区の「山崎記念館」と中地区の「肥後医育記念館」の周辺は、細川藩時代から連綿と続く熊本の医学の歴史に触れることができる「シンボルエリア」として本荘キャンパスの顔づくりを進める。

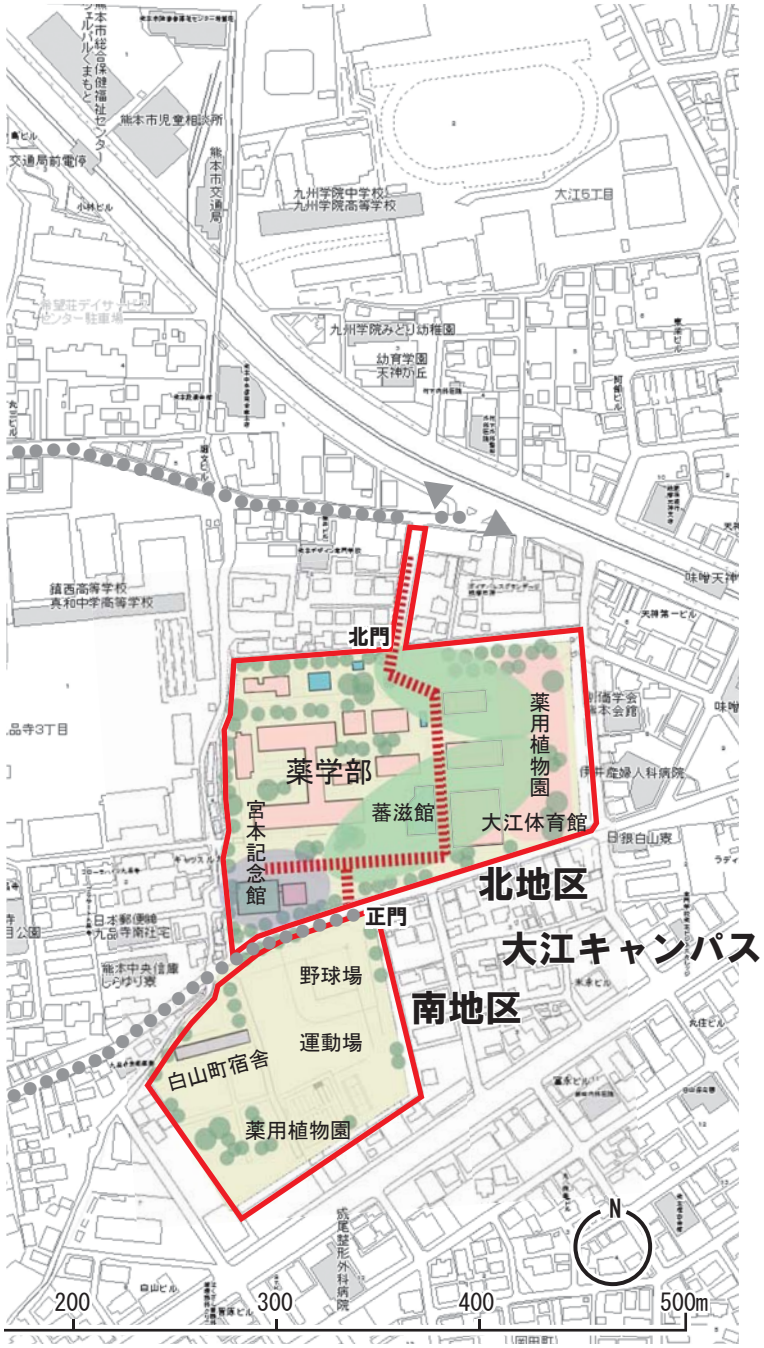


図 3-3　本荘・大江キャンパスの基本目標

≪大江キャンパス≫

細川藩時代の『蕃滋園』までさかのぼる薬学教育の伝統を継承する象徴的な空間として大江キャンパス全体を覆っている薬草と樹木を将来にわたって保護・育成していくとともに、それらに囲まれて薬学の先端的な研究と生命倫理の哲学を培うための施設の充実を図る。薬学の学術的な資料と精神的な心の拠りどころである『宮本記念館』一帯を「シンボルエリア」として大江キャンパスの顔づくりを進める。

（２）快適な学園生活の環境づくり

≪本荘キャンパス≫

北・中・南を南北につなぐ交流ゾーンを設定し、学生教職員の生活空間として快適な屋外空間を提供するとともに、北・中地区にある福利厚生施設と南地区の楷樹会館のつながりを円滑にする。

≪大江キャンパス≫

外部にも開放されている薬用植物園から北門にかけての一帯と正門から学生食堂が入居する『蕃滋館』及び大江体育館一帯を「交流ゾーン」として歩行者空間の快適性を高める。

（３）地域交流・国際交流の環境づくり

≪本荘キャンパス≫

地域医療の拠点施設である附属病院への外来患者への対応、先端医療研究施設への国内外からの研究者の来訪への対応に応えられる施設の充実を図る。

≪大江キャンパス≫

薬草植物園は市民に開放し市民参加を促しながら地域交流の場としての充実をはかるとともに、『宮本記念館』を国際交流の場として充実を図る。

≪本荘・大江キャンパス≫

生命科学研究部等の医療系の大学院は、医学部・薬学部の学際的な研究・教育が求められるため、本荘と大江両キャンパス間の連携を強化する。さらに、周辺市街地、特に白川を超えた中心市街地のコンベンションやアフターコンベンションの場へ徒歩でのアクセスを促すために、キャンパス出入口の改善等を行う。その結果として、白川河岸で整備が進む水辺の緑地帯伝いに黒髪キャンパスとのつながりも強化され、『学都熊本』のイメージが強化されることを目指す。

グローバル化に対応するため、留学生や外国人研究者の宿舎を整備する。

3-1-3　京町キャンパスの基本目標の設定

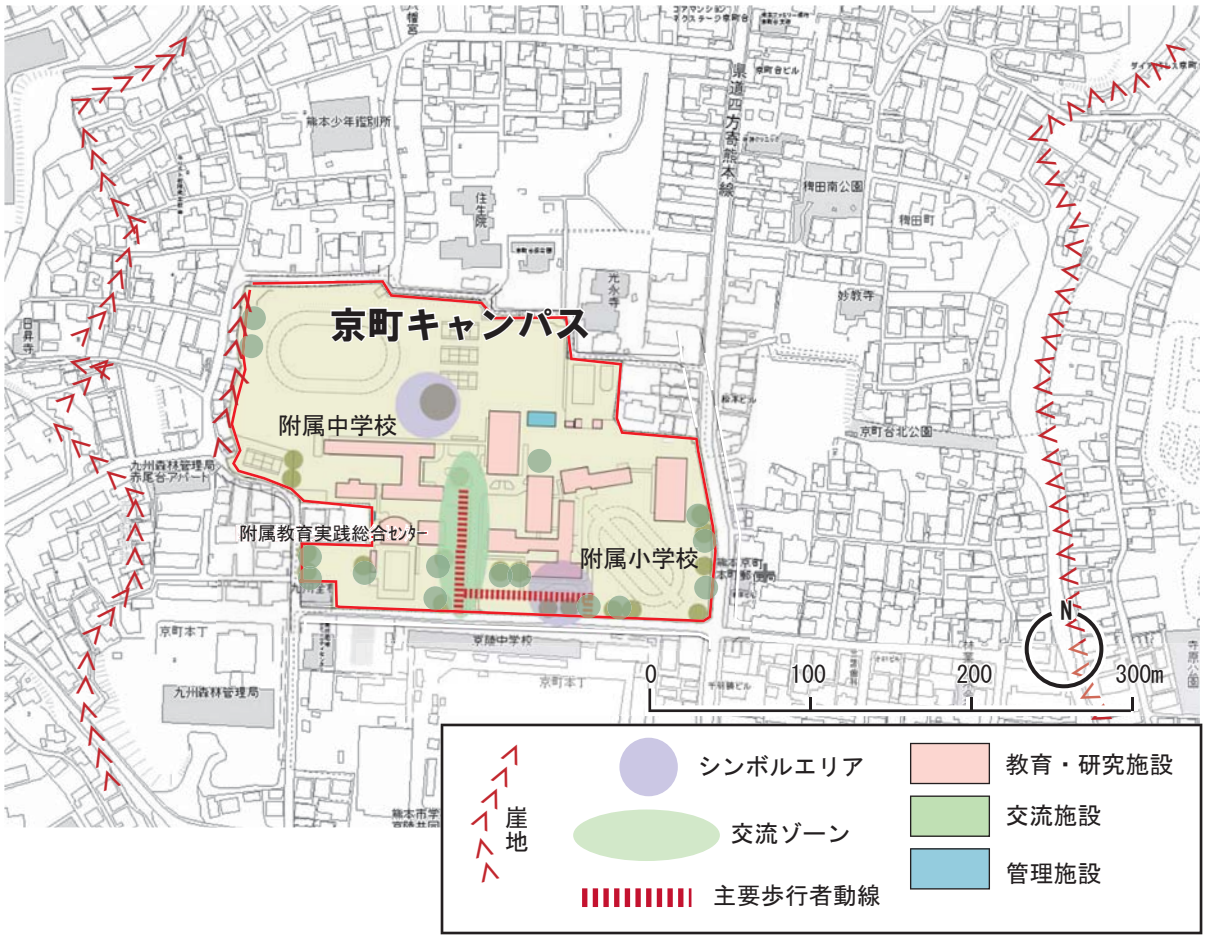


図 3-4　京町キャンパスの基本目標

（シンボルエリアの設定）

京町キャンパスは、高さ 20 メートルほどの崖に挟まれた南北に細長い京町台の上にある。台地上を南北に走る県道四方寄（よもぎ）熊本線は旧豊前街道であり、キャンパス周辺は江戸時代の城下町であり寺も多い。1893 年（明治 26 年）に藪ノ内町から師範学校が附属小学校とともに当地に移転し、1951 年（昭和 26 年）師範学校廃止に伴い熊本大学附属中学校、同小学校となった。後に新制熊本大学教育学部は黒髪キャンパスに移転し小中学校のみが残った。附属教育実践総合センターは、黒髪にあった「教育学部附属教育工学センター」が建物の建設とともに 1981 年（昭和 56 年）に当地に移転し、その後改組されて現在の名称になっている。そのような、歴史と伝統の痕跡をとどめる附属小学校正面玄関前庭および附属中学校に残る楓の大樹周辺を「シンボルエリア」とし、キャンパスの顔づくりを行う。

（交流ゾーンの設定）

教育学部「附属教育実践総合センター」と小中学校共通の園路一帯を「交流ゾーン」として外部空間の快適性、景観的なまとまりの向上を図る。

（施設整備の目標）

初等中等教育の先進的研究と教育実習校という２つの使命を担いながら『未来を担う子供たちのための、健康で伸びやかな環境の創造』を施設整備の目標とする。

3-1-4　城東町キャンパスの基本目標の設定

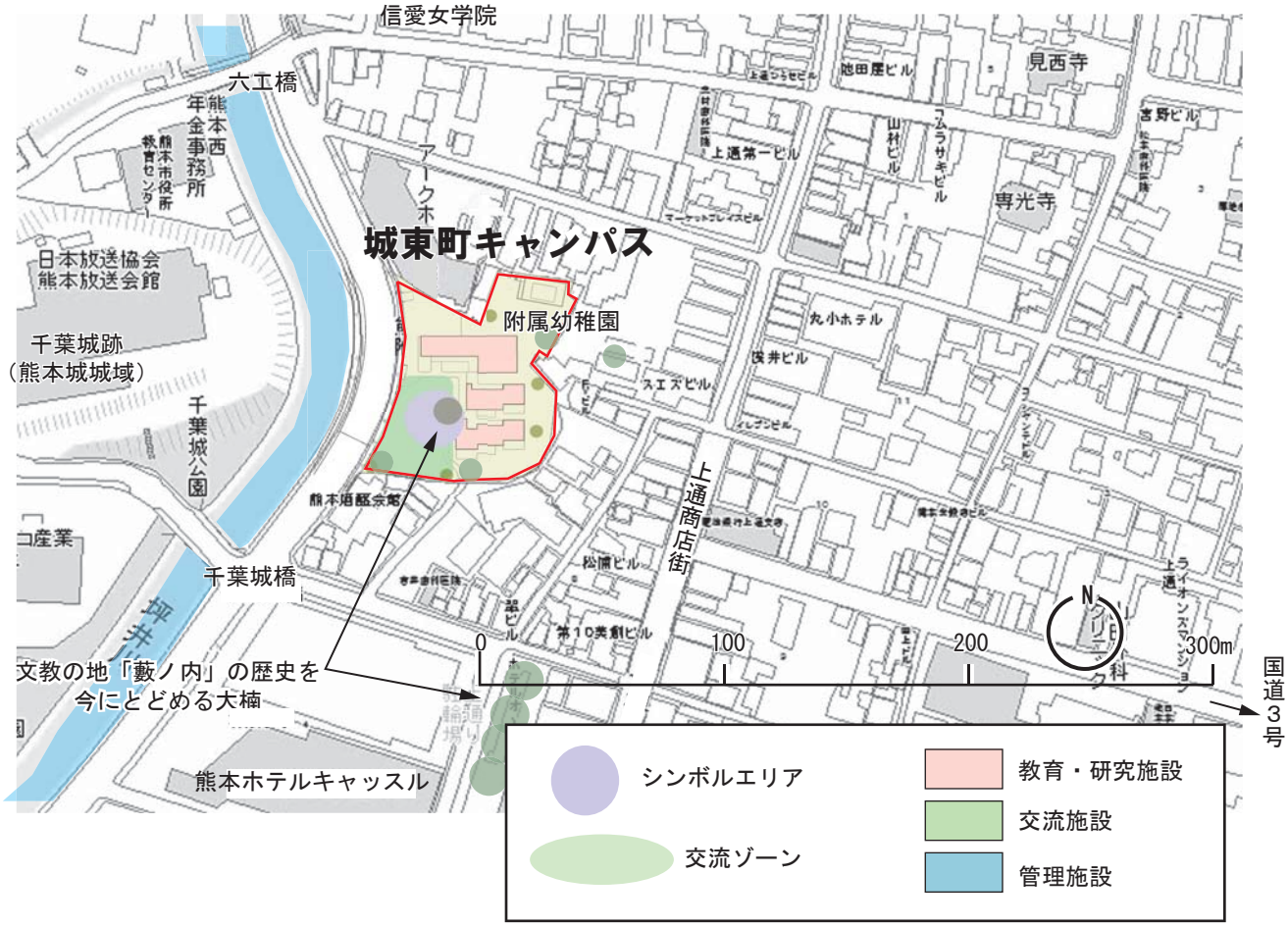


図 3-5　城東町キャンパスの基本目標

（シンボルエリアの設定）

坪井川と国道３号線に挟まれた上通地区の一角を占める。付近には現在も文教施設が多く、現ホテルキャッスル周辺の通称『藪ノ内』と呼ばれる一帯は熊本の「文教発祥の地」である。そのような歴史的な背景を象徴し、坪井川対岸の熊本城域の緑および天守閣の景観を借景として坪井川に沿った運動場のシンボル樹木である大楠の周辺一帯をシンボルエリアとし、キャンパスの顔づくりを行う。

（施設整備の目標）

幼稚園教育の先進的研究と教育実習校という２つの使命を担いながら『未来を担う子供たちのための、健康で伸びやかな環境の創造』を施設整備の目標とする。

３－２　施設・ゾーニング計画の基本方針

3-2-1　黒髪キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

キャンパス内の建物と外部空間、さらにはキャンパス外との関係について、基本目標に沿った整備と維持・管理を行っていくために、以下の５つのゾーンを設定する。

（１）教育・研究ゾーンの形成

県道 337 号をはさんで北側に位置する文学部・法学部・教育学部等のある黒髪北キャンパスと南側に位置する理学部・工学部等のある黒髪南キャンパスにおいて、教育・研究施設の集積するエリアにそれぞれ教育・研究ゾーンを設定する。各学部は独自のアドミッションポリシー（入学者受け入れ方針）を設定して各学部の特色と社会的役割（ミッション）を明らかにしている。これら各学部のミッションを汲み取りながら、キャンパス内の教育・研究施設と支援施設の充実を図っていく。

（２）交流ゾーンの形成

黒髪北キャンパスの学生会館や附属図書館を含む一帯を北の「交流ゾーン」と設定し、教育・研究支援施設である附属図書館や黒髪体育館も含め全学的な交流の場としての整備を図る。また黒髪南キャンパスの赤煉瓦建物、工学部研究資料館、百周年記念館を含む一帯を南の「交流ゾーン」と設定し、学生の交流施設である黒髪南Ｃ１や本部も含めて同じく全学的な交流の場としての整備を図る。施設整備に当たっては建物と外部空間の一体化、交流広場の整備に配慮する。南地区の FORICO はゾーンから離れているが動線計画や広場の整備等で交流を促進するように配慮する。

（３）管理ゾーンの形成

全学の本部が黒髪南キャンパスにあり、管理ゾーンの主エリアと位置づけられる。加えて、黒髪キャンパスでは、敷地の外周部に管理施設や倉庫等が分散していることから、それらの施設を配置するゾーンとして敷地の外周部および敷地境界部を積極的に管理ゾーンと位置づける。

以上の３ゾーンはフレームワークプランに示される主要３ゾーンであるが、黒髪地区の基本目標の設定から以下の２つのゾーンを特別ゾーンとして加える。

（４）シンボルゾーンの形成

五高記念館から県道を越えて工学部百周年記念館までの一帯を「シンボルゾーン」と位置づけ、ここを日常的に訪れる学生教職員及び外部からの来訪者に対して本学の歴史と伝統を喚起する場となるような整備を図る。

（５）バッファーゾーン（緩衝地帯）の形成

キャンパスの敷地外周部は管理施設や倉庫等を配置する場所となる（前出「管理ゾーン」）とともに、キャンパスを取り巻く周辺環境から本学の姿として眼に映る箇所でもある。そこで、周辺道路等と本学の緑・塀・石垣・門等の境界要素が一帯となり、景観形成等を行っていくべきバッファーゾーン（緩衝地帯）として設定する。

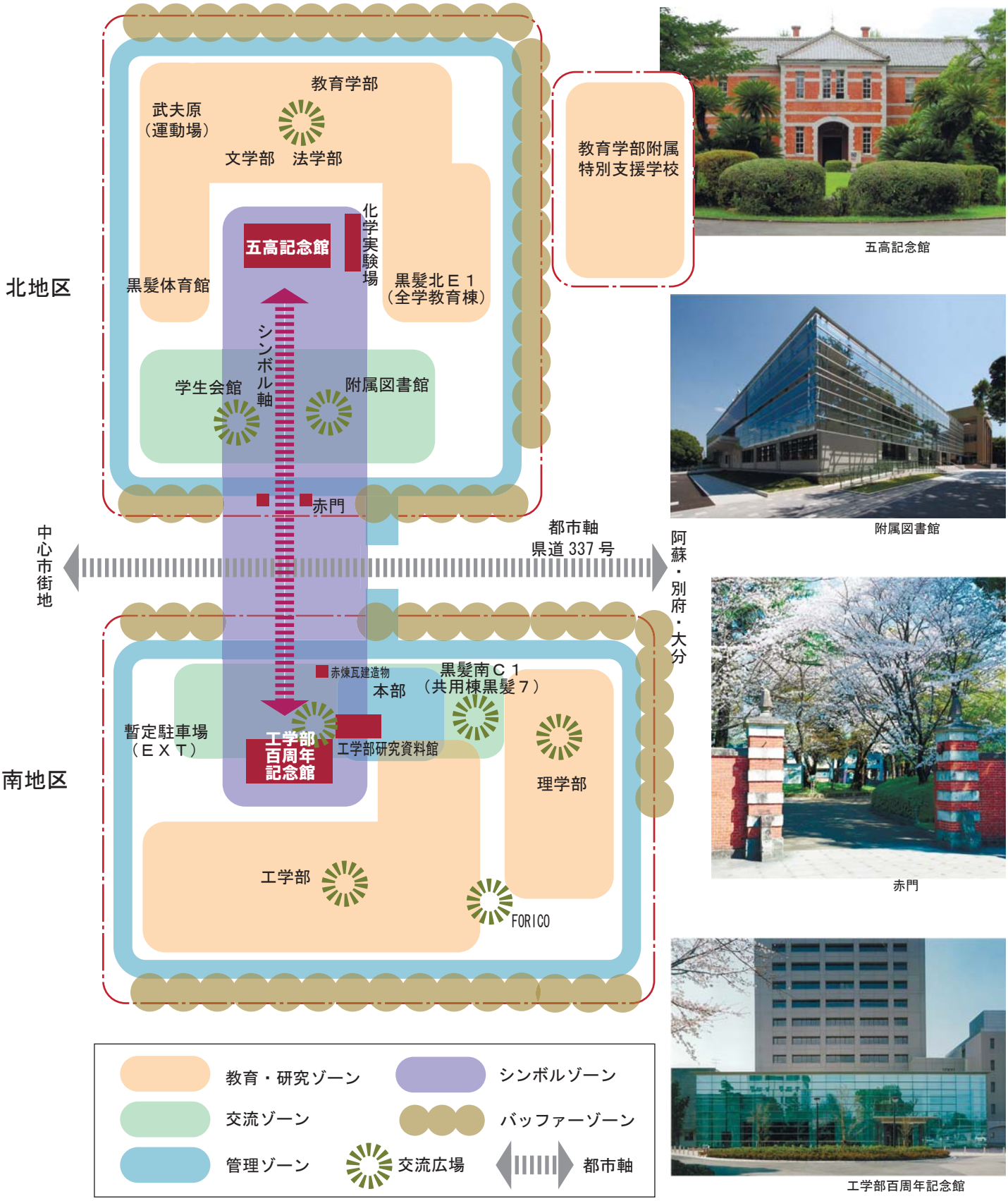


図 3-6　黒髪キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

3-2-2　本荘キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

（１）教育・研究ゾーンの形成

北地区は基礎医学・臨床医学の教育研究機能、中地区は先端的研究機能、南地区は保健教育･研究機能を集約し、国際的な医学研究拠点を形成する。

（２）交流ゾーンの形成

北地区は外来診療と教育研究機能が複雑に複合するため、各部門間の人の動きを円滑にし、快適なキャンパス生活を維持するための癒しの空間として交流ゾーンを設定する。中地区は研究施設の中央を南北に貫くモール一帯を交流ゾーンとし、南地区は学生食堂の入居する楷樹会館一帯を交流ゾーンとする。

（３）管理ゾーンの形成

北地区では管理施設や倉庫等は敷地奥の白川側に集約し、中地区では敷地南西隅に集約する。北地区外来診療棟南側の管理棟に医学部附属病院事務管理部門を置く。

（４）シンボルエリアの形成

北地区「山崎記念館」、中地区「肥後医育記念館」一帯をシンボルエリアと位置づけ、熊本における医学の歴史を学び未来の生命科学を展望するエリアとなることを目指す。

（５）バッファーゾーン（緩衝地帯）の形成

キャンパスの敷地外周部をバッファーゾーンとして周辺市街地との緩衝地帯として緑化等の整備を行う。特に、産業道路の両側は、医学部キャンパスの認知度を視覚的に高める重要な要素であるため、道路の街路樹と一体的な景観を成すことを目指す。

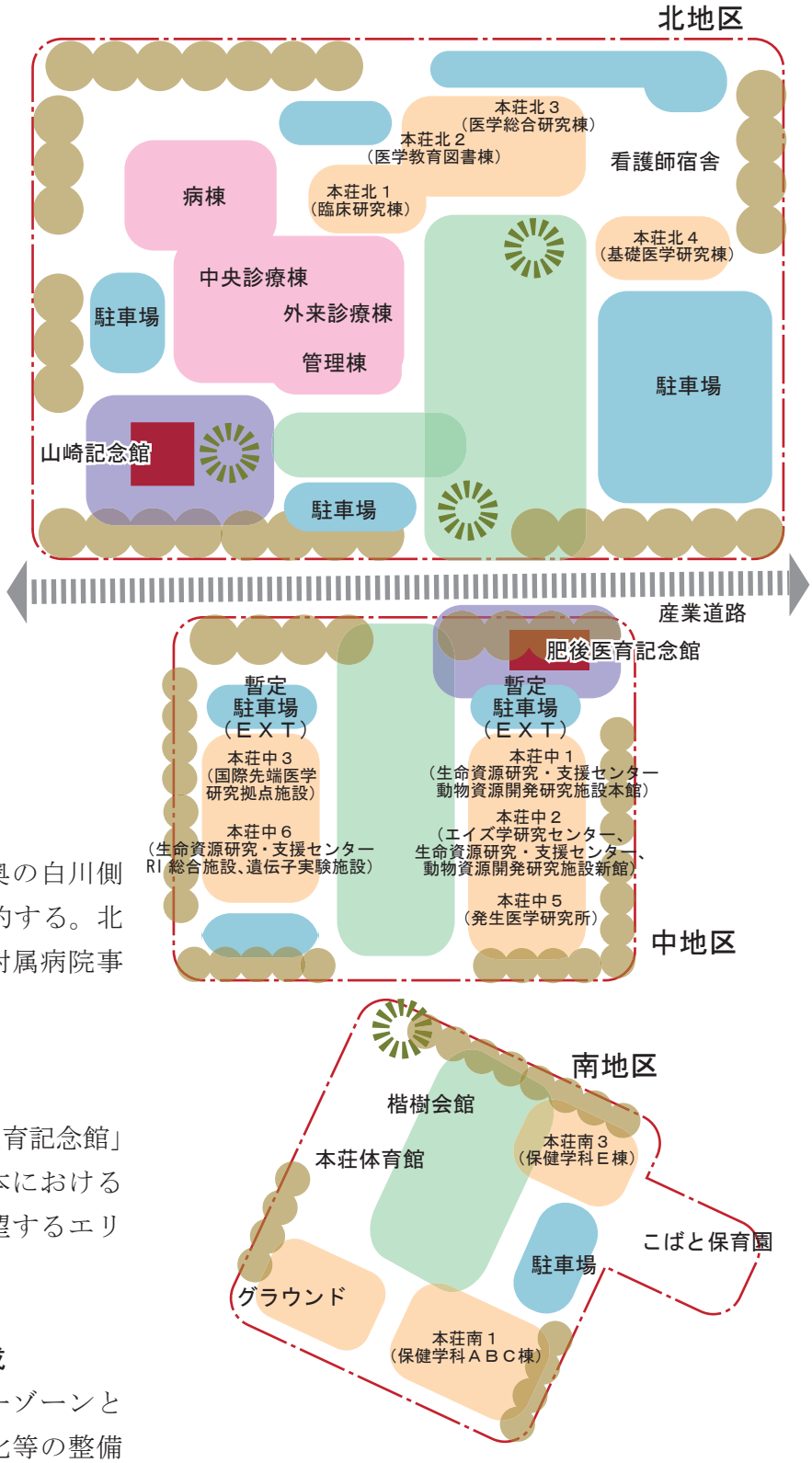


図 3-7　本荘キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

3-2-3　大江キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

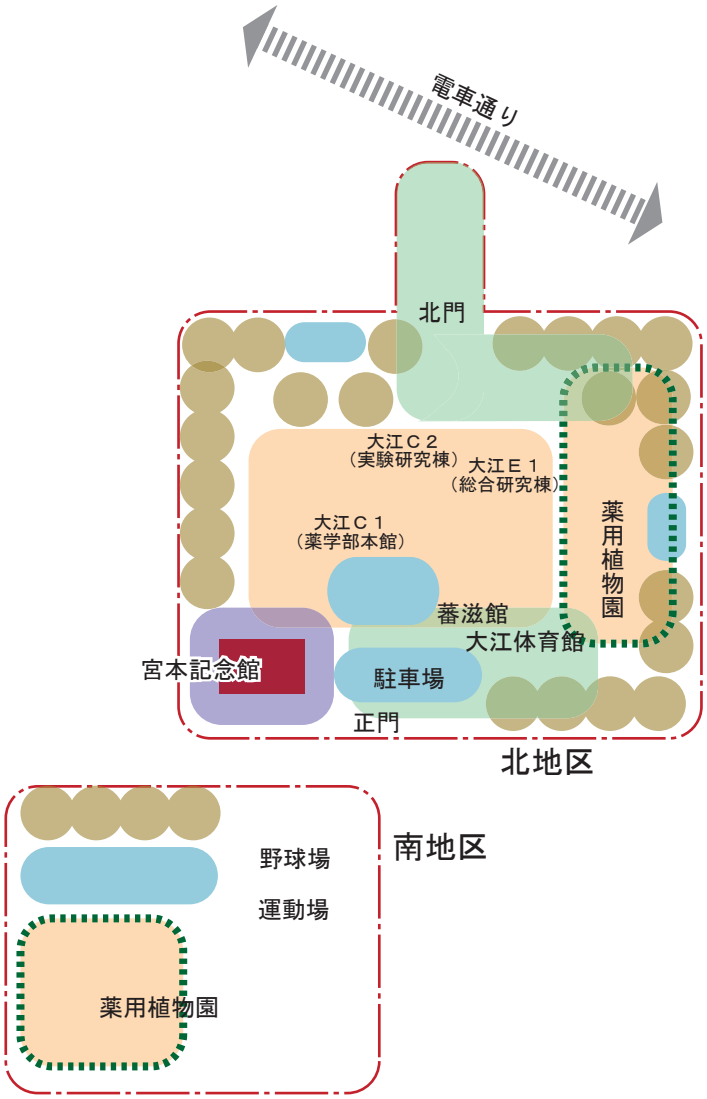
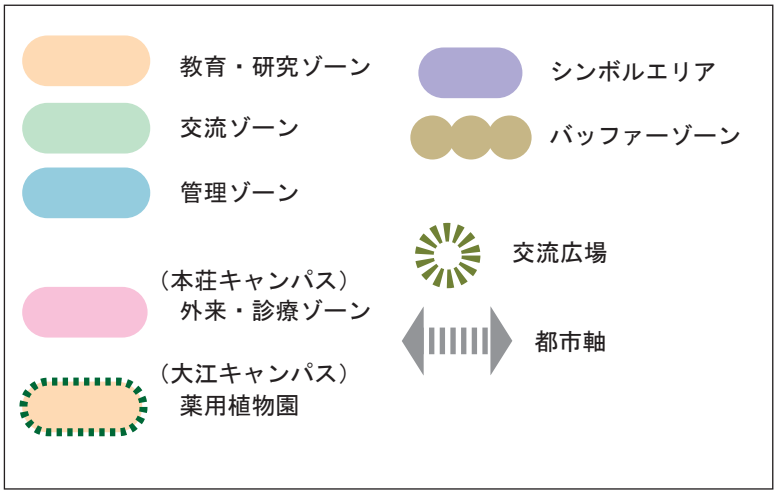


図 3-8　大江キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針



（１）教育・研究ゾーンの形成

薬草に囲まれたキャンパスに単一学部の研究教育施設が集積する、という特徴を活かし、臨床と創薬研究に取組むための教育・研究ゾーンの形成を図る。

（２）交流ゾーンの形成

在学生・教員・ＯＢ・外部研究者がキャンパス内で交流を促進するとともに、市民や観光客が植物と生命科学に接するため、北門、正門から薬用植物園へのアプローチを交流ゾーンとして設定する。正門側の交流ゾーンは、蕃滋館、大江体育館を含み宮本記念館までの一帯を交流ゾーンとする。

（３）管理ゾーンの形成

キャンパス敷地の外周部に管理施設や倉庫等を配置する管理ゾーンを設定する。大江Ｃ１に薬学部事務管理部門を置く。

老朽化が著しい白山町宿舎については、グローバル化に対応した施設に有効活用することを検討する。

（４）シンボルエリアの形成

宮本記念館一帯をシンボルエリアと位置づけ、熊本における薬学の歴史を学び未来の生命科学を展望するエリアとなることを目指す。

（５）バッファーゾーン（緩衝地帯）の形成

キャンパスの敷地外周部をバッファーゾーンとして周辺市街地との緩衝地帯として緑化等の整備を行う。キャンパスの外周全体を覆っている、散策をしながら薬草を観察できる木立を保護育成する。

3-2-4　京町キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

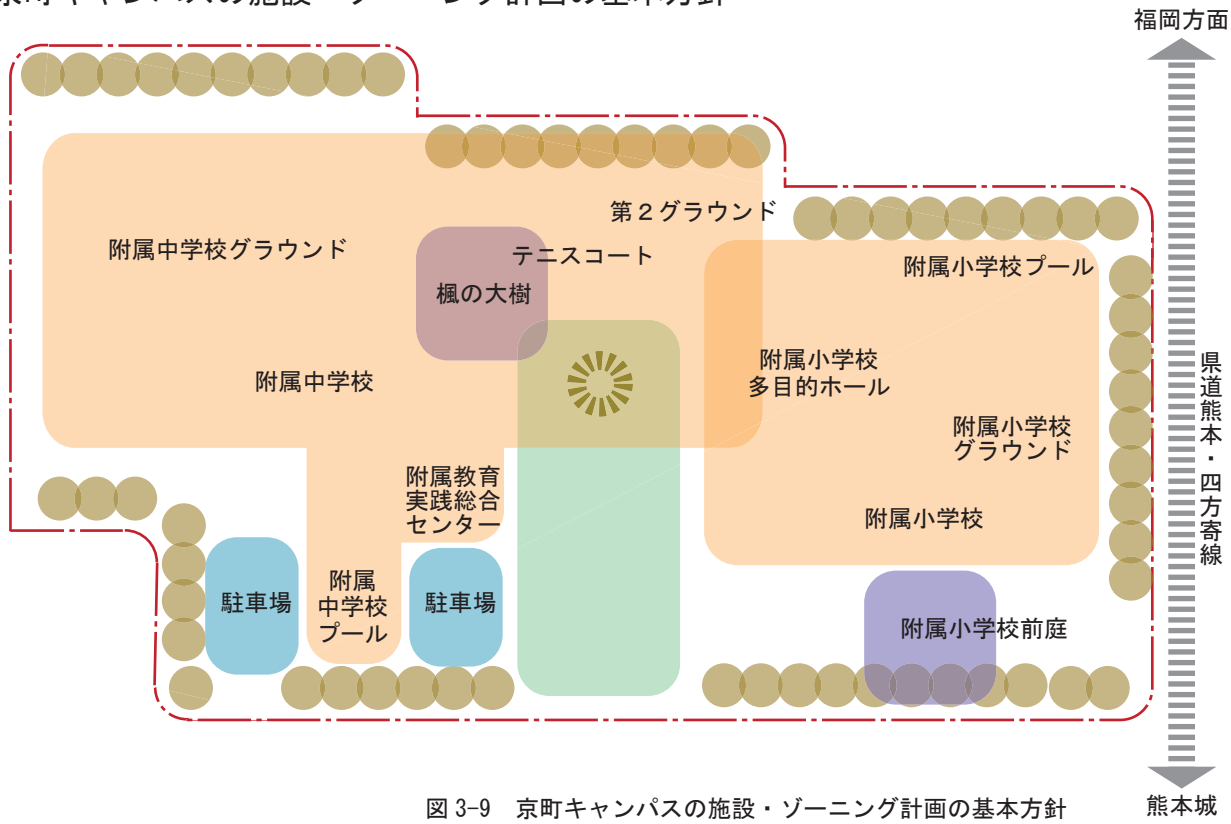


図 3-9　京町キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

（１）教育・研究ゾーンの形成

正門から伸びる構内道路を境に東を附属小学校、西を附属中学校としてゾーン形成する。

（２）交流ゾーンの形成

正門から伸びる構内道路一帯、附属小学校と附属中学校の間のゾーンを交流ゾーンとする。

（３）管理ゾーンの形成

駐車場は、周辺道路及び出入口の至近距離に配置し、校内への自動車の進入を抑制する。

以上の３ゾーンはフレームワークプランに示される主要３ゾーンであるが、京町地区の基本目標の設定から以下の２つのゾーンを特別ゾーンとして加える。

（４）シンボルエリアの形成

歴史的な遺構の残る小学校前庭一帯および中学校グラウンドの楓の大樹周辺をシンボルエリアとして設定し、伝統ある附属小中学校の歴史を顕彰するとともに、教育学の未来を展望する教育学研究者の心の拠りどころとする。

（５）バッファーゾーン（緩衝地帯）の形成

敷地外周部は周辺市街地との緩衝地帯となるバッファーゾーンとし、樹木の育成と管理を行う。

3-2-5　城東町キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

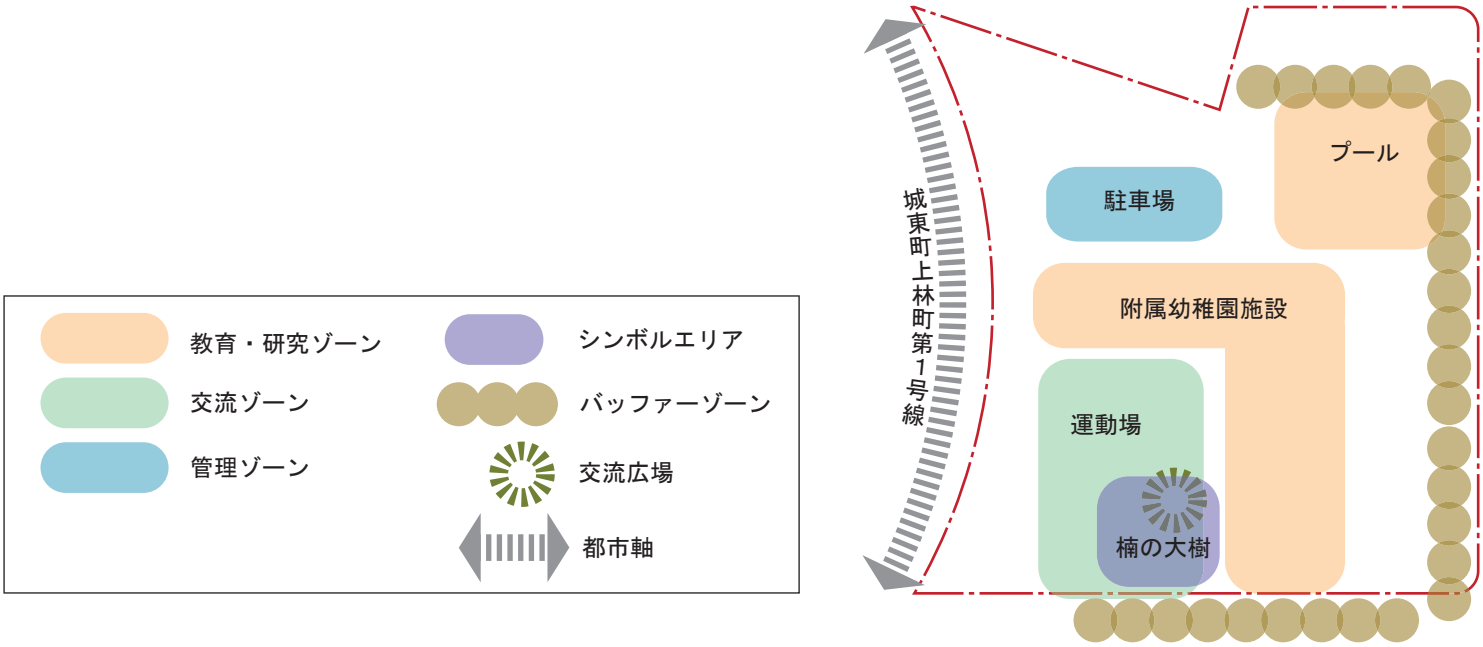


図 3-10　城東町キャンパスの施設・ゾーニング計画の基本方針

（１）教育・研究ゾーンの形成

運動場を取り囲むように幼稚園施設と隣棟間育成園、プール等の教育・研究ゾーンを設定する。

（２）交流ゾーンの形成

運動場を多目的な交流の場となる交流ゾーンとする。

（３）管理ゾーンの形成

自動車進入口から間近のゾーンに駐車場を集約する。

以上の３ゾーンはフレームワークプランに示される主要３ゾーンであるが、城東地区の基本目標の設定から以下の２つのゾーンを特別ゾーンとして加える。

（４）シンボルエリアの形成

運動場片隅にある楠の大樹周辺を、幼稚園全体のシンボルゾーンとして顕彰する。

（５）バッファーゾーン（緩衝地帯）の形成

敷地外周部は周辺市街地との緩衝地帯となるバッファーゾーンとして、樹木の育成と管理を行う。特に、隣接する住宅地の間は緩衝緑地の管理に努める。

３－３　動線計画の基本方針

3-3-1　黒髪キャンパスの動線計画の基本方針

整備対象を点・線・面に対応してとらえた場合、前出のゾーニングと後出の景観計画とを結びつけ総合的な整備効果を図るためには「線」の展開である動線計画が重要となる。

「キャンパス交通計画」を基本としながら動線計画の基本方針を立案する。

（１）歩行者専用動線の形成

歩行者の動線をキャンパス内のアクティビティ（人の動き）の基本とする。県道をまたぎ北地区と南地区を南北につなぐシンボル軸を歩行者動線の骨格とし、供用施設の集積する交流ゾーンとも歩行者の主要動線で結ぶ。さらに、シンボルゾーンと各学部を結ぶアクティビティも可能な限り歩行者専用動線で結ぶ。

（２）歩行者・自転車共存動線の形成

自転車動線は、出入口から教育・研究ゾーンの各学部までの乗り入れは可能とするが、シンボルゾーンへの乗り入れは規制する。

駐輪場の配置については、歩行者動線を優先させて、教育・研究ゾーン各学部のニーズに応じた配置計画とする。

（３）主要な自動車動線の形成

キャンパス内の動線は歩行者の動き（動線）を基本とするが、物流等のサービスと駐車のための自動車の動線確保も不可欠である。そこで、自動車の主要動線はキャンパス敷地の外周部をループ状に回し、可能な限り歩行者・自転車動線と交差しないように配慮する。

駐車場の配置は、ループ状に回した自動車動線に近い位置に配置する。

五高記念館へ至るサインカーブ道路

（４）出入口の改善と強化

北地区と南地区を連絡する出入口の安全性の向上と歩行者動線の連続化を図り、黒髪キャンパスとして両地区の一体化を図る。同時に、立田山方面、白川方面への出入口の環境整備により、周辺の自然及び歴史的資源へのアクセスを強め、黒髪キャンパスと一体となった学都熊本のハイライトゾーンを形成する。

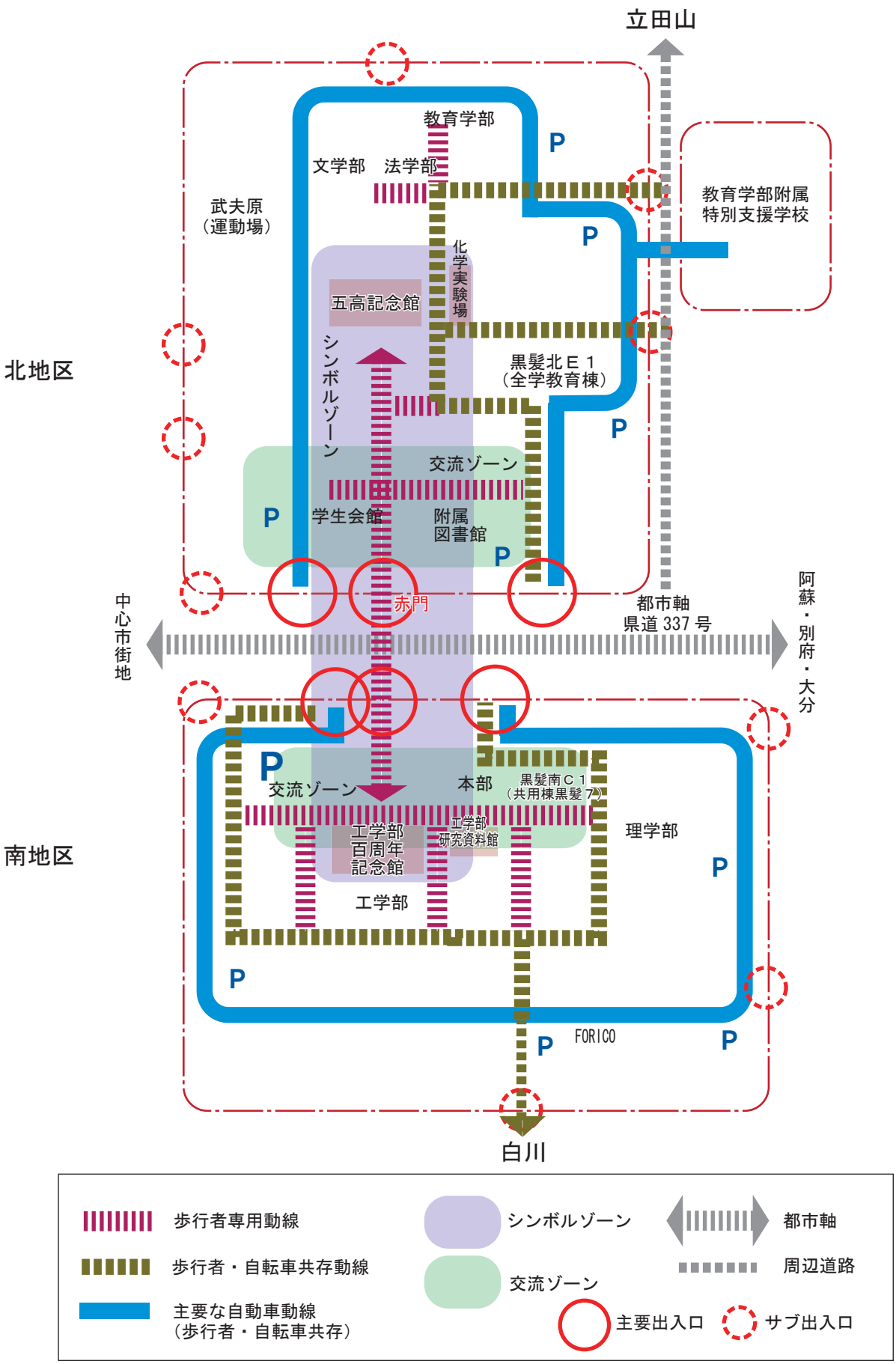


図 3-11　黒髪キャンパスの動線計画の基本方針

3-3-2　本荘キャンパスの動線計画の基本方針

（１）歩行者動線の形成

産業道路から北地区、中地区へのアプローチを主要入口とし、北地区、中地区、南地区間の歩行者動線の連続性を強化し、１つのキャンパスとして３地区の一体化を図る。

（２）自転車動線の共存

自転車は、キャンパス全体で自動車・歩行者との共存とするが、駐輪場の集中する北地区メイン出入口周辺において歩行者の安全性確保に配慮する。

（３）主要な自動車動線

北地区では、外来者用の大規模駐車場の円滑な運営と出入口付近での混雑解消を図る。外来自動車動線の先に白川側に集中する管理施設へのサービス動線をループ状に回す。

中地区では、敷地外周部に自動車動線を回し歩行者動線と交差しないようにする。南地区では、歩行者自転車動線をキャンパス全体をつなぐ主軸として際立たせるために、自動車動線を外周部に回す。

（４）出入口の強化

北地区と中地区、中地区と南地区を連絡する出入口で歩行者動線の連続化を図り、１つのキャンパスとして３地区の一体化を図る。

隣接する小松原公園、西原公園、白川と連携したサブ出入口の環境整備を行い、学生・教職員の生活環境の向上を図る。

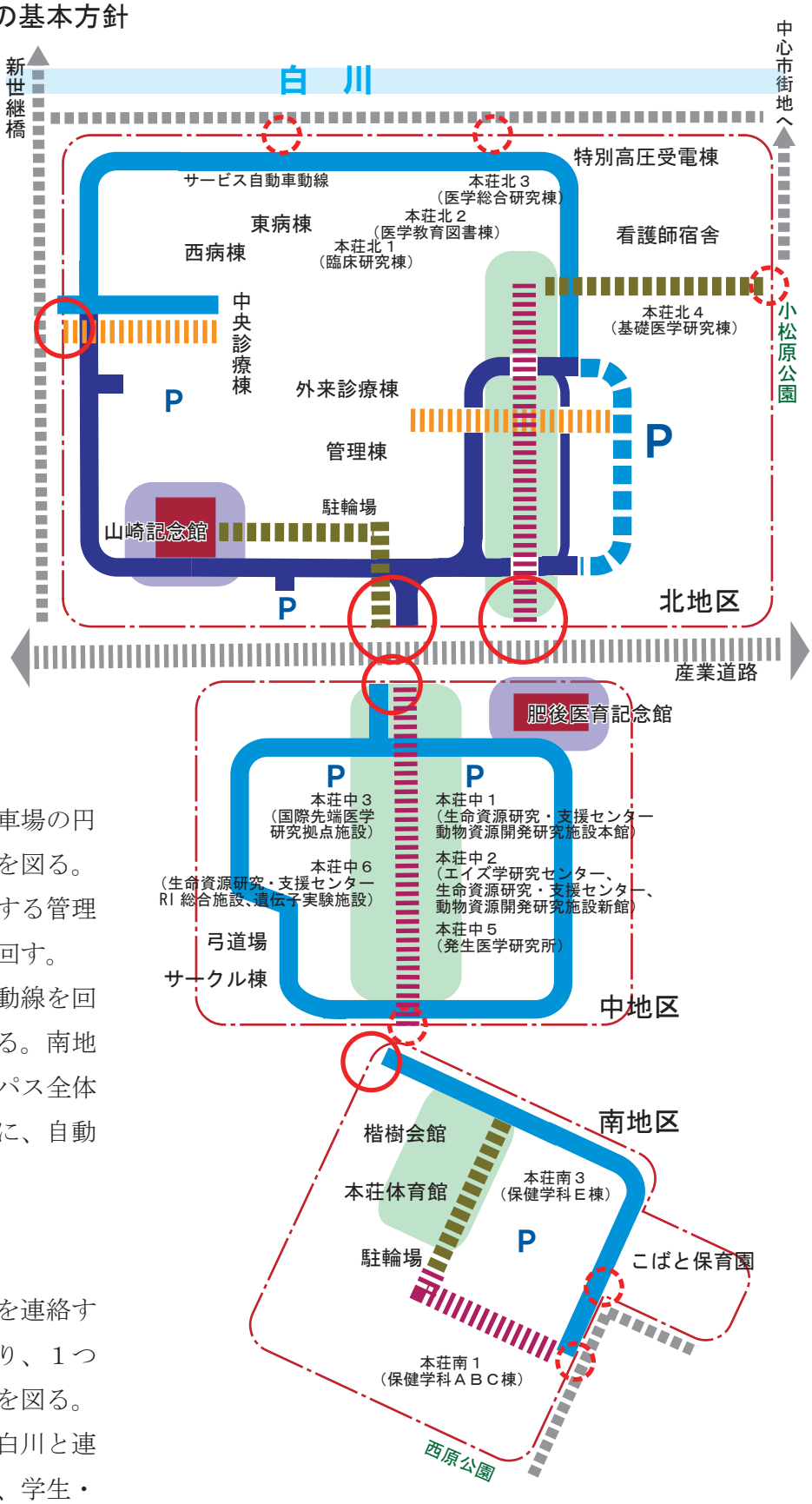


図 3-12　本荘キャンパスの動線計画の基本方針

3-3-3　大江キャンパスの動線計画の基本方針

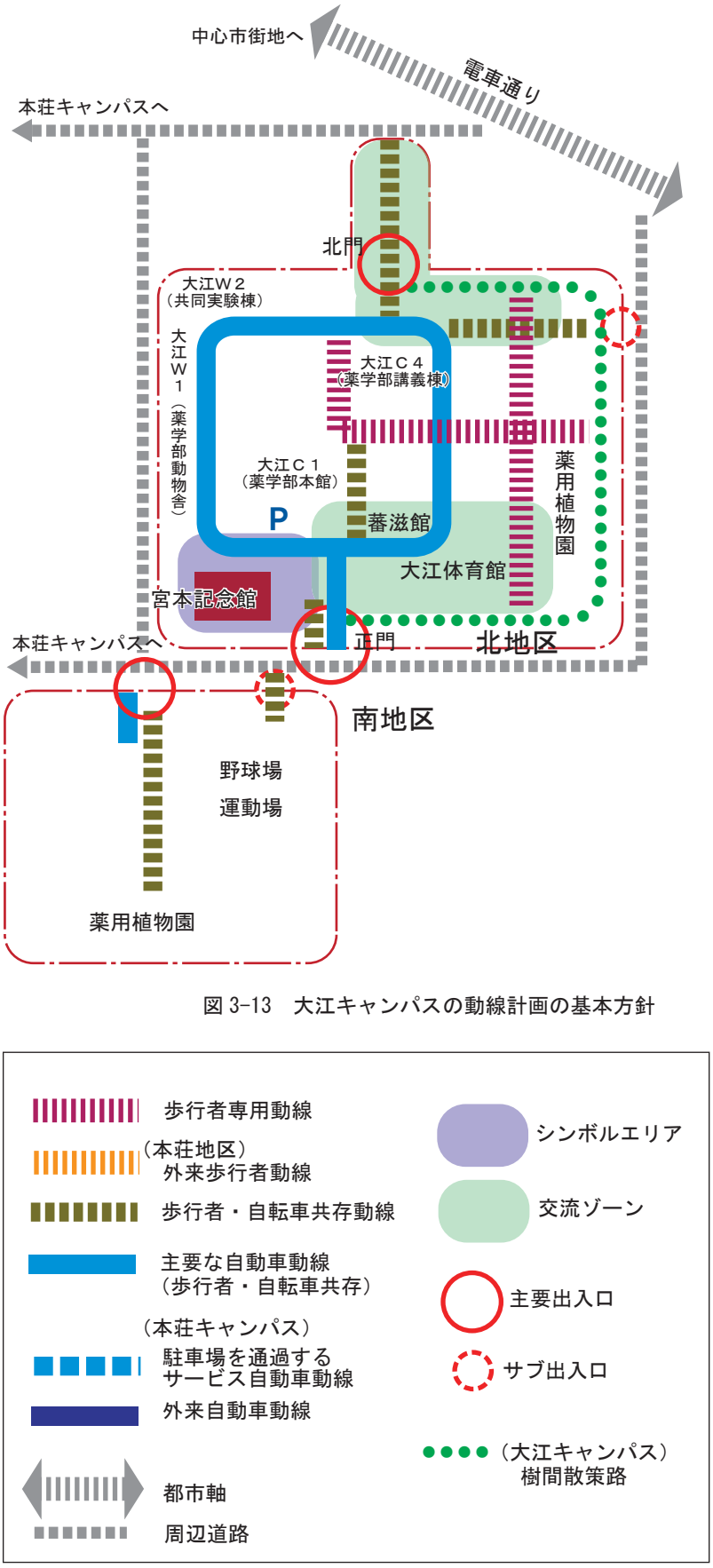


図 3-13　大江キャンパスの動線計画の基本方針

（１）歩行者動線の形成

周辺市街地との積極的な連携とキャンパスの存在を外へ向けて主張するために北側・電車通り側の北門の積極利用を促し、南側正門とをつなぐ明確な歩行者軸を形成する。

同時に、本キャンパス固有の資源である薬用植物園を囲む樹間散策路を北門、正門と明確に結ぶ。

（２）自転車動線の共存

駐輪場を講義棟近くに配置し、南北の門から自動車動線と共用しながら自転車動線を誘導する。

（３）主要な自動車動線

駐車場は本館玄関前に集約し、研究棟周りへの車両の進入を防ぐ。

（４）出入口の強化

北地区と南地区を連絡する出入口で歩行者動線の連続化を図り、１つのキャンパスとして両地区の一体化を図る。

（南地区）

南地区については、薬学部の将来のエクステンションゾーン（機能拡大用地）の性格を持つため、積極的な動線計画は立てない。

3-3-4　京町キャンパスの動線計画の基本方針

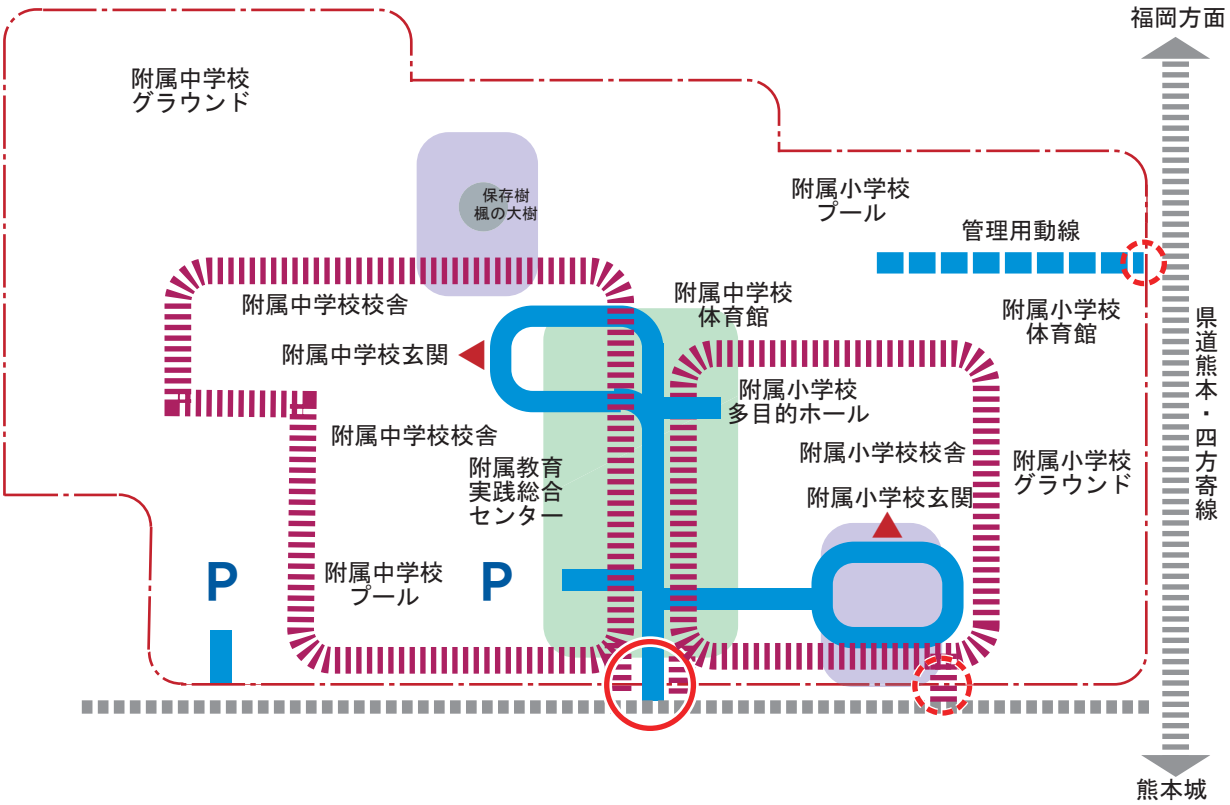


図 3-14　京町キャンパスの動線計画の基本方針

（１）歩行者専用動線の形成

正門から附属中学校玄関までの交流ゾーンに沿った園路歩道を歩行者動線の主軸として、附属小学校側、附属中学校側でそれぞれに校舎を囲む歩行者動線を確保する。

附属小学校玄関前の門は登下校時のみ開門し児童の通行に資する。

（２）歩行者・自転車共存動線の形成

キャンパス内では自転車は押して歩行者との共存動線とする。

（３）主要な自動車動線の形成

自動車の駐車は正門から入ったすぐ左側の駐車場に集約し車両の進入を極力抑えて児童生徒の安全を図る。駐車場の不足分は農園の一部を利用転換して補う。

小中学校玄関前の車回し、および附属小学校多目的ホールへの車両動線は確保するが、搬出入車を除く用務車は駐車場に車を置き、内部へ自動車を進入させない。

県道熊本・四方寄線のサブゲートからの進入は工事等管理用車両の動線とする。

3-3-5　城東町キャンパスの動線計画の基本方針

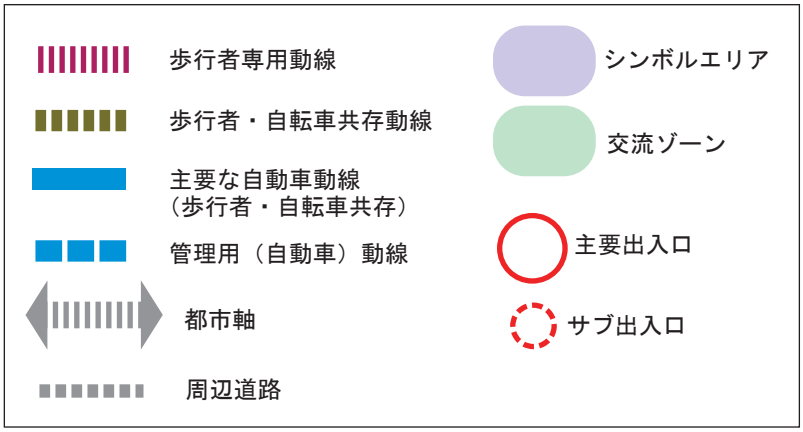


図 3-15　城東町キャンパスの動線計画の基本方針

（１）歩行者専用動線の形成

坪井川に沿った市道城東町上林町第１号線から運動場の縁を周回する歩行者専用動線を確保し、シンボルエリアである楠の大樹や交流ゾーンとなる運動場を一望する視点を、園児、職員および来訪者が共有する。

周辺道路からのサブゲートは通常時は閉門するが、避難等非常時の対応には備える。

（２）歩行者・自転車共存動線の形成

自転車は北側のサブゲートから進入し、駐輪場に駐輪し、他のゾーンには進入しない。

（３）主要な自動車動線の形成

自動車は北側のサブゲートから進入し、駐車場に駐車し、他のゾーンには進入しない。

３－４　景観計画の基本方針

3-4-1　黒髪キャンパスの景観計画の基本方針

熊本大学黒髪キャンパスは、立田山と白川という熊本市の都市景観の骨格となる景観資源に隣接し、学都・熊本の拠点としてふさわしい位置にある。そのような立地条件を活かし、キャンパス内外の景観が一体となって熊本の都市景観に寄与することを景観整備の基本とする。

（１）バッファーゾーンの景観整備

キャンパス外周帯をバッファーゾーン（緩衝地帯）として、緑地の積極的な管理等による景観整備を進める。乱雑になりがちな管理施設や倉庫等の視覚的な秩序と景観的な調和を図り、樹木等を用いた環境整備を施す。北キャンパスの北及び東側接道部では、自治体と共同して外周道路の安全快適な歩行者路を確保することを検討する。同様に南キャンパスの白川河畔においても、河川管理者等と共同してキャンパスと白川との親和性を強めることを検討する。また、県道 337 号に面した北および南キャンパスの接道部では、門・石垣・土塁・樹木等を用いて黒髪キャンパス固有の大学の顔づくりに努める。

（２）緑の維持・保全・管理

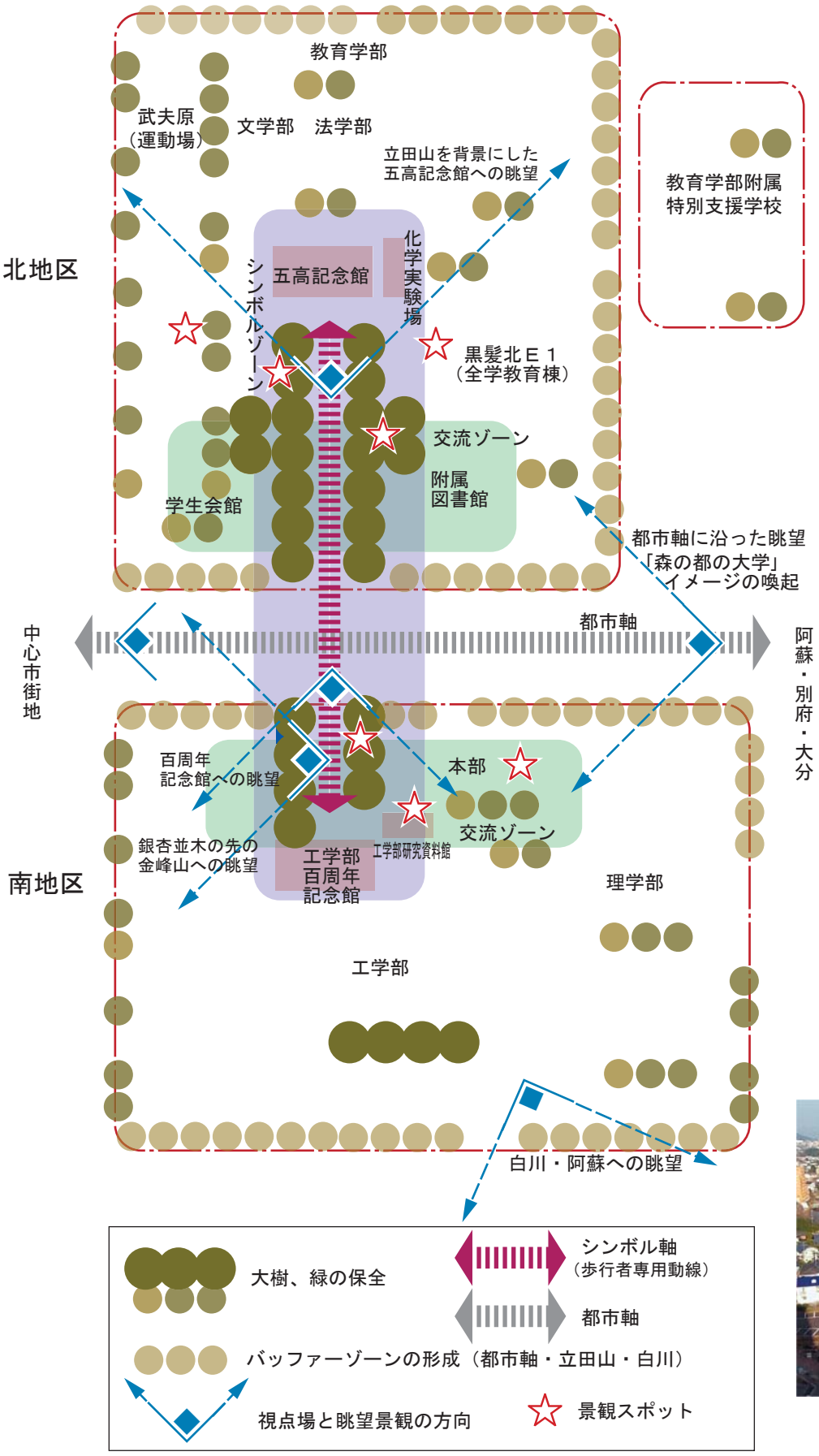
平成 24 年度策定の「キャンパス緑地管理ガイドライン」に基づき、キャンパス内の大樹を保全し、地域固有の風土に即した草木の維持・管理を行い、キャンパス内の良好な景観および環境を形成するとともに、「森の都」熊本の緑の拠点づくりに寄与するような整備に努める。

（３）歴史・自然を感じる眺望景観の整備

県道 337 号に沿う東西軸は、黒髪キャンパスの接道要素および、道路、歩道によって景観が形成される。それらが一体となり「森の都の大学」のイメージを喚起するような整備を行う。また、キャンパス内におけるシンボルゾーンでは五高記念館、工学部百周年記念館等のキャンパスを代表する主要建物、サインカーブや広場に見合った舗装、植栽、街灯、サイン等の整備を行い、それらが一体となった景観形成を図るとともに、景観を認識するための視点場を整備する。

（４）景観スポットの強化

五高記念館や工学部百周年記念館のようなキャンパスを代表する景観とともに、記念碑や彫刻、各学部の正面玄関、赤煉瓦の黒髪南Ｃ10（共用棟黒髪４）や黒髪南Ｃ１（共用棟黒髪７）のような小規模だが特徴のある建物、利用する学生・教職員も風景の一部となっている広場等、景観整備を行うことによってキャンパスの魅力を高めるような場所が数多くある。そのような場所をここでは「景観スポット」と呼び、景観の対象物とともに歩行者路や植栽等周囲の環境とが、景観を認識する人の眼にバランスよく映るような総合的な整備を図る。



立田山への眺望

都市軸に沿った眺望

景観スポット　龍南健児の像

白川・阿蘇への眺望

図 3-16　黒髪キャンパスの景観計画の基本方針

3-4-2　本荘キャンパスの景観計画の基本方針

（１）バッファーゾーン（緩衝地帯）の景観整備

北地区の白川に面した一帯では、管理施設や倉庫等との調和を図りながら白川緑地と呼応した眺望景観を形成する。

北地区東側のサブゲート、南地区南側のサブゲートは隣接する都市公園と調和したエントランス景観の形成を図る。

北地区と中地区を連絡する出入口、中地区と南地区を連絡する出入口における景観の連続化を進め、本荘キャンパスの連続一体化を図る。

（２）緑の維持・保全・管理

山崎記念館前（北地区）のシンボル樹木をはじめとするキャンパス内の樹木を保全し、緑の維持管理を行い良好な景観および環境を形成する。

（３）歴史・自然を感じる眺望景観の整備

北地区、中地区の産業道路に面した樹木を育成し、街路樹と一体となった都市軸眺望景観を形成する。

キャンパス内においても、北地区、中地区のプラムナードに沿った眺望を並木によって強調する。

（４）景観スポットの強化

キャンパス内に点在する記念碑、慰霊碑等周辺の環境を美化し、景観スポットとして顕彰する。

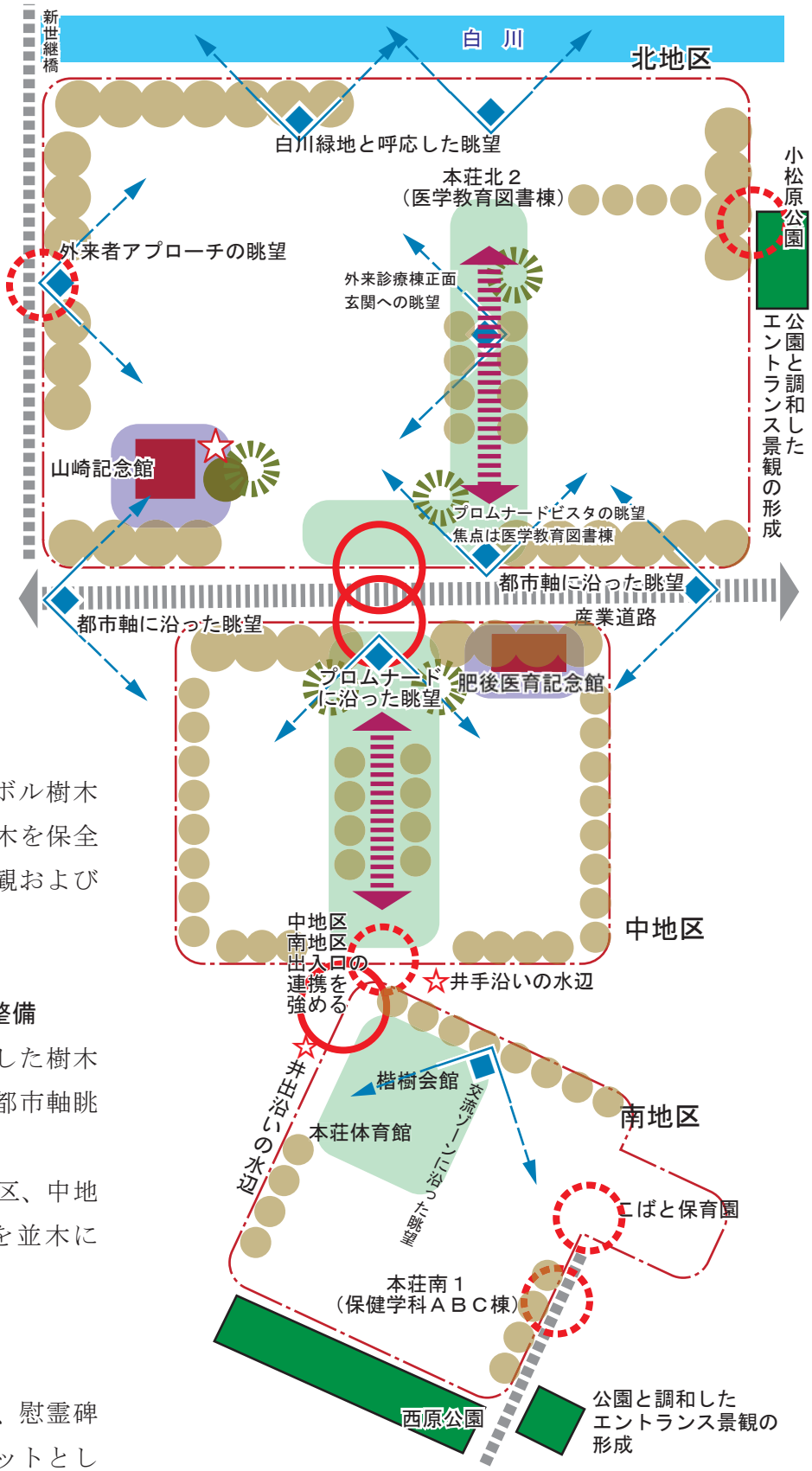


図 3-17　本荘キャンパスの景観計画の基本方針

3-4-3　大江キャンパスの景観計画の基本方針

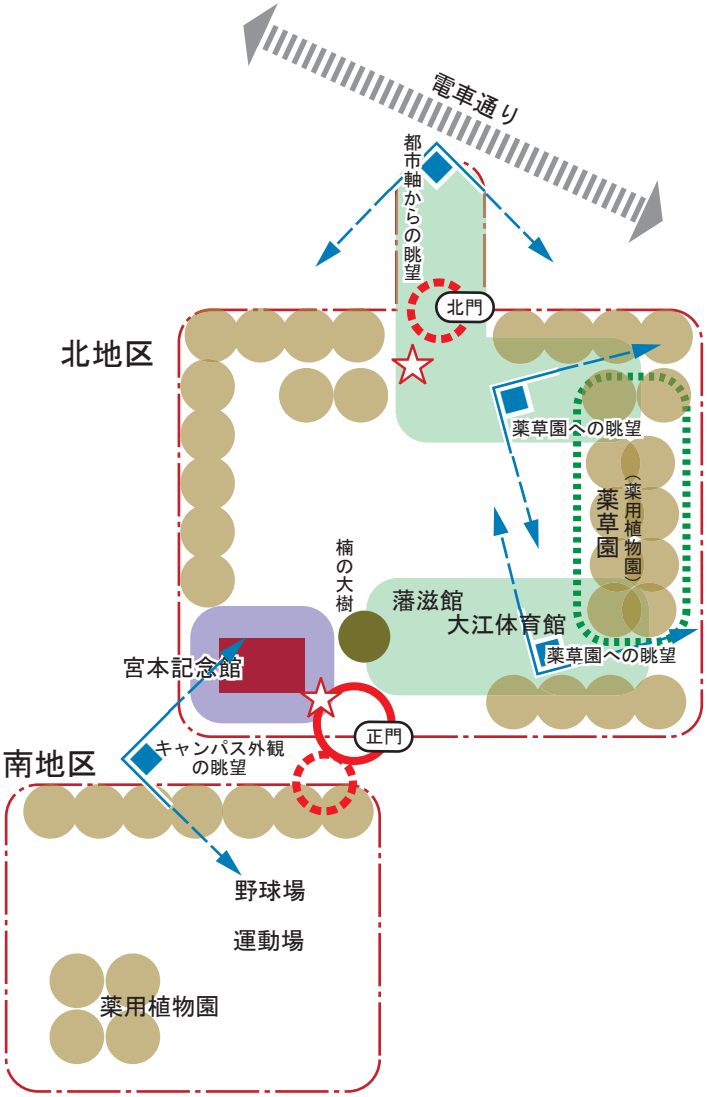
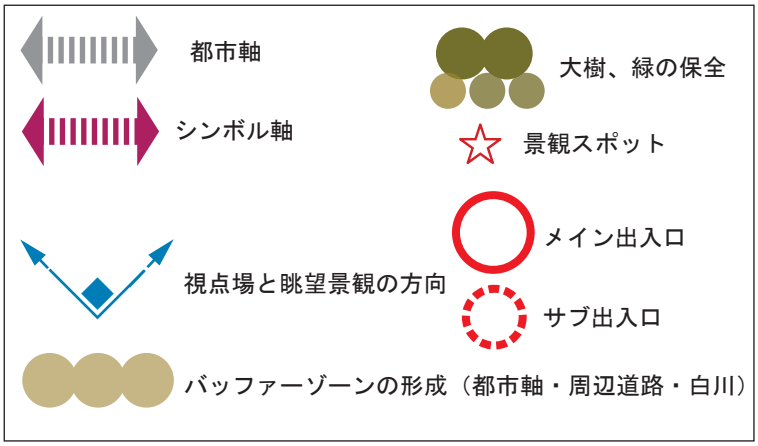


図 3-18　大江キャンパスの景観計画の基本方針



（１）バッファーゾーン（緩衝地帯）の景観整備

敷地外周部は周辺市街地との緩衝地帯であると同時に管理施設や倉庫等の設置場所でもある。緑の保全・維持・管理によって敷地外周部の門や塀、管理施設等の景観的な調和を図る。

（２）緑の維持・保全・管理

正門前の楠の大樹をはじめとするキャンパス内の大樹を保全し、地域固有の風土に即した草木の維持管理を行い、キャンパス内の良好な景観および環境を形成するとともに、「森の都」熊本の緑の拠点づくりに寄与するような整備に努める。

（３）歴史・自然を感じる眺望景観の整備

北門からのアプローチは都市軸である電車通りから見通せる。大江キャンパスの存在感を高めるために、このアプローチ道路の並木道を強調し、焦点となる北門とその先にあるロータリーの樹木が象徴的な景観を形成することを促す。

薬草園（薬用植物園）と宮本記念館を核として、キャンパス全体が地域に開放された「薬草パーク」となるような景観整備を進める。

（４）景観スポットの強化

正門から宮本記念館周辺および北門周辺にある記念碑等の環境整備によって、散策しながら熊本大学の歴史を顕彰できる場となるように努める。

3-4-4　京町キャンパスの景観計画の基本方針

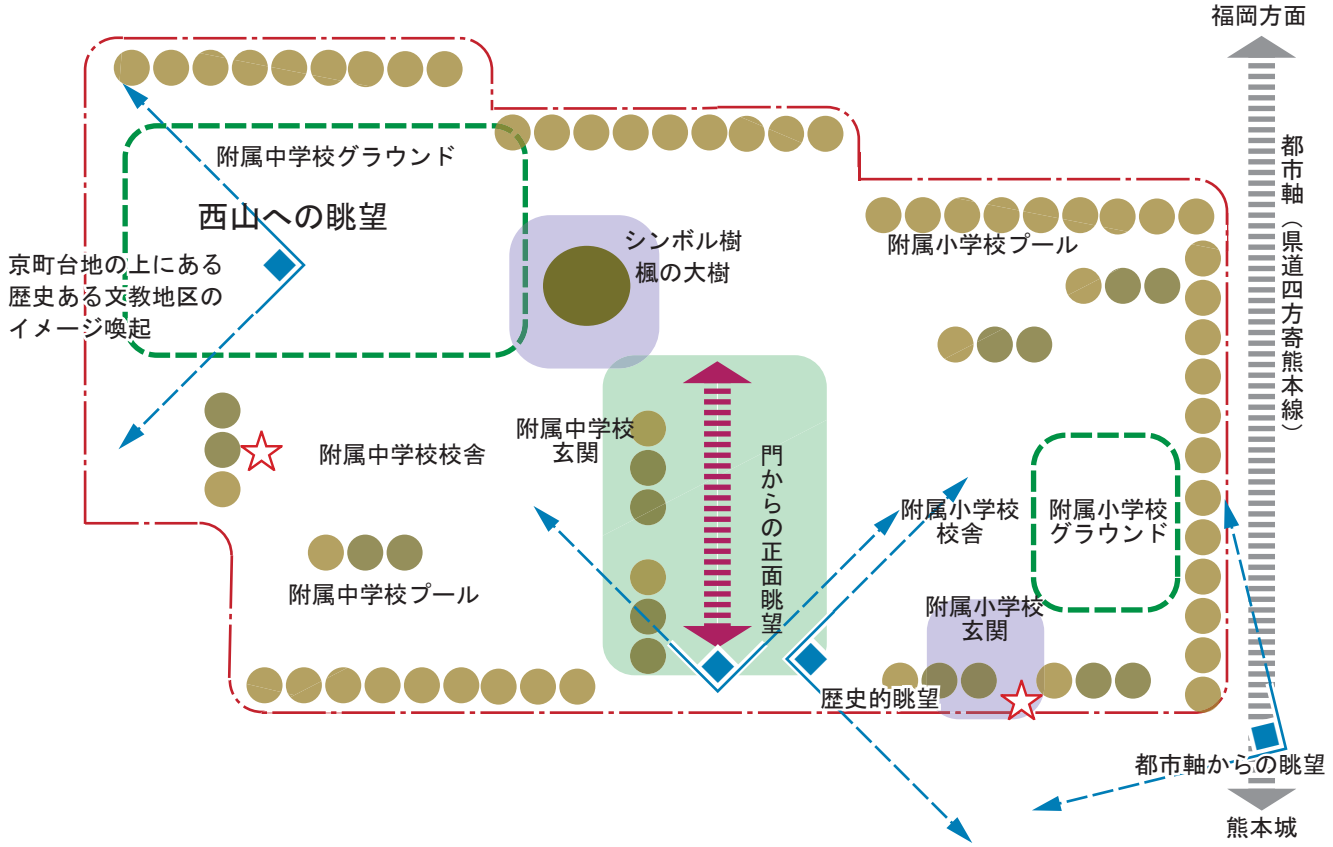


図 3-19　京町キャンパスの景観計画の基本方針

（１）バッファーゾーンの景観整備

敷地外周部は周辺市街地との緩衝地帯であると同時に管理施設や倉庫等の設置場所でもある。緑の保全・維持・管理によって敷地外周部の門や塀、管理施設等の景観的な調和を図る。

県道四方寄熊本線沿いの樹木は、落ち葉に考慮した剪定管理を行いながら、都市軸の景観形成に寄与し、当キャンパスの存在を喚起するよう配慮する。

（２）緑の維持・保全・管理

附属中学校グランド端にあるシンボル樹木（楓の大樹）をはじめとするキャンパス内の樹木を保全し、緑の維持管理を行い良好な景観および環境を形成する。

（３）歴史・自然を感じる眺望景観の整備

京町台の台地景観を体験できる附属中学校グラウンドから西山への眺望景観を確保するために敷地西側の樹木は低く剪定する。

（４）景観スポットの強化

附属小学校玄関前、附属中学校西校舎西の記念碑等の周辺環境を美化し、景観スポットとして顕彰する。

3-4-5　城東町キャンパスの景観計画の基本方針

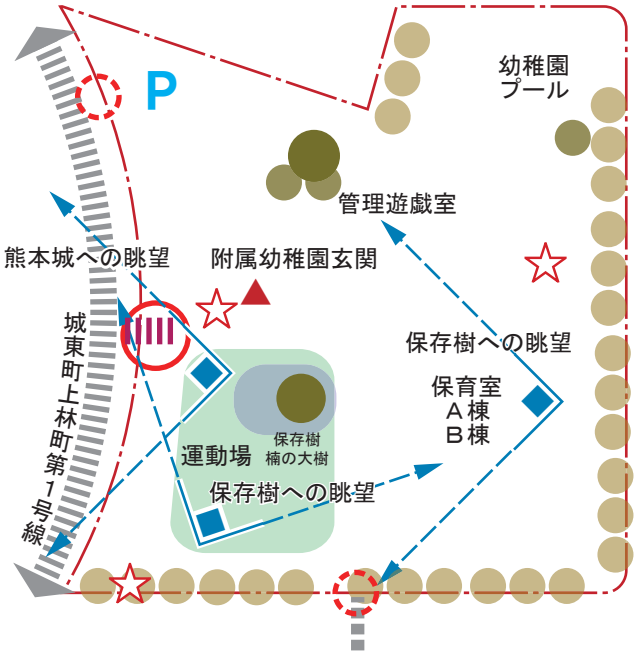


図 3-20　城東町キャンパスの景観計画の基本方

（１）バッファーゾーンの景観整備

敷地外周部は周辺市街地との緩衝地帯であると同時に管理施設や倉庫等の設置場所でもある。緑の保全・維持・管理によって敷地外周部の門や塀、管理施設等の景観的な調和を図る。

（２）緑の維持・保全・管理

グランド端にある保存樹（楠の大樹）をはじめとする園内の樹木を保全し、緑の維持管理を行い良好な景観および環境を形成する。

（３）歴史・自然を感じる眺望景観の整備

運動場から熊本城の圧倒的な緑地景観の眺望は、当キャンパスの持つ歴史的背景を喚起するとともに坪井川およびキャンパス内の緑と一体となって「森の都」熊本の景観を形成する。運動場から熊本城への眺望、園内各所から保存樹への眺望を将来にわたって保全・継承する。

（４）景観スポットの強化

運動場隅、保育室周りの手づくり遊具は、園児の情操を育てるための有効な手段であり、景観スポットとしても保全管理し、周辺環境の美化に努める。